日本環境心理学会 第12回大会・総会





白鷗大学本キャンパス(南館) 2019年3月9日(土)

◆ワークショップ(623 教室)

10:00-12:00

WS1『健康と環境の心理学』

話題提供者:湯川進太郎(筑波大学) 話題提供者:島崎 崇史(上智大学) 話題提供者:高木 大資(東京大学) 指定討論者:羽生 和紀(日本大学) 企画・司会:平田 乃美 (白鷗大学)

近年、米国の社会政策の柱の一つである肥満や不健康を防止軽減するための施策、都市・地域計画においては、「健康を促進する環境 Healthy environments」という概念が広く取り入れられています。今回のワークショップでは、わたしたちの健康 Well-Being を促す環境、およびヒトの健康に関わる環境心理学研究の展望について、身体、地域コミュニティ、疫学・公衆衛生の視点から、3名の研究者に話題を提供いただき、議論します。

12:05-12:55 昼休み/運営委員会(624 教室)

13:00-14:00 総会(623教室)

◆研究発表 1 □頭発表 (発表 15 分, 質疑応答 5 分) (623 教室)

座長 畑 倫子

14:00-14:20

1. 日本版環境刺激敏感性尺度の作成とその特徴

越智 啓太(法政大学)

ちょっとした物音などのノイズに対しての敏感性の高さを測定する Winstein (1978) の環境刺激敏感性尺度について現代の日本の大学生を対象に調査を行ったところ、尺度としていくつかの問題点が見いだされた。そこで、いくつかの新規項目を加え、日本語版の尺度を再構成した。また、同様な尺度の「匂い」刺激敏感性バージョンの尺度を作成した。そして、それらの尺度の特性や別の尺度との関連性について検討した。

14:20-14:40

2. 異なる環境で行なうハスワークの効果 -年齢,性別,障がいの有無を越えて-

富村 芽久美 (東北工業大学)

日本で「花祭り」と呼ばれる韓国の「潅仏会(かんぶつえ)」は、旧暦の、5月12日に行われる。その1週間ほど前から、華やかなイベントが行われ、韓紙(はんじ)を材料とする蓮が作られる。「花祭り」には、このような伝統はないが、蓮を作るワークショップが「ハスワーク(商標登録中)」として、西日本で密かなブームとなっている。本研究では、「ハスワーク」を5歳から81歳の男女に行なった。また、知的障害を持つ8歳から9歳の児童4名に授業参観の親子制作として行なった。環境の異なる4回のワークショップと、知的障害を持たない人達のアンケート調査から、「達成感」というキーワードが浮き彫りとなった。また、知的障がいを持つ児童達はこちらの問いかけで、ある程度の答えを導くことができた。ハスワークは年齢、性別、障がいの有無に関わらず、多くの人達に「楽しさ」と「達成感」を与えること。また、ワークショップを行なう環境が異なっても、「楽しさ」と「達成感」を与えられることが結論付けられた。

14:40-15:00

3. 秋冬季における都市近郊林での自然観察会が心身に与える影響

高山 範理(森林機構)·佐野 由輝(林野庁)·伊藤 弘(筑波大学)

森林環境内における活動には、MTB・トレランのような運動強度の高い利用法や、教育目的や自然観察会のような能動的な学習の場としての利用法がある。回復目的ではないこれらの利用法であっても、森林環境を活用した体験である以上、心身に一定の回復効果が期待できる可能性がある。そこで秋冬

季の都市近郊林での自然観察会の参加によって、参加者の心身に生じる影響について探索的に調べた。被験者は延べ17名(男性5名、女性12名、33歳(±11.63))だった。冬季(7名)と秋季(10名)に二名の自然観察指導員を講師として自然観察会を実施した。実施前後で唾液アミラーゼ活性、主観的回復(ROS-J)、気分の状態(POMS)を測定した。分析の結果、生理指標の唾液アミラーゼ活性は事後に上昇したが、心理指標の気分の緊張-不安、怒り-敵意、混乱の三項目が事後に有意に低下、主観的回復感が有意に上昇し、特に心理的な回復効果がもたらされる可能性が示された。

15:00-15:20

4. 2次元離散 FFT に基づくパワースペクトルを用いた景観写真の分類

羽生 和紀(日本大学) 大森 宏(東京大学大学院)山下 雅子(東京有明医療大学)島田 諭(東京大学大学院)

景観写真のフーリエ変換によるパワースペクトル表示を 2 次的な画像データとして解析し、土地利用による分類を試みた。具体的には、緑地、水辺、住宅地それぞれ 5 枚ずつの、グレースケール化した景観写真に対する離散的な高速フーリエ変換(FFT)による 2 次元のパワースペクトル表示を縦横 3x3 の 9 分割し、分割されたセルごとに、明度(波の強度)の平均値と SD を算出した。それらを各景観写真の変数(平均が 9 変数,SD が 9 変数)として階層的クラスター分析(Ward 法)を行った。その結果、すべての景観写真はそれぞれの土地利用として正しく分類された。簡便な方法による景観画像の自動解析の可能性が示唆された。

◆研究発表 2 口頭発表 (発表 15 分, 質疑応答 5 分) (623 教室)

座長 高山 範理

15:25-15:45

5. スマートフォンを用いた環境心理学的なフィールド研究の可能性 -歩きスマホ抑制のフィールド実験実施の経験から-

広田 すみれ(東京都市大学) 森 久美子(関西学院大学) 大山 和政(JR 東日本研究開発センター) 小野寺 順(JR 東日本秋田運輸区) 越川 正治(JR 東日本研究開発センター) 白井 郁男(JR 東日本研究開発センター)

平成29年度にスマートフォンの世帯保有率は75.1%とPCの保有率を上回り、特に若者で高くなっている。このことからスマートフォンのGPSなどの機能を用いてフィールドで研究を行うことが従来よりも手軽になった。広田ら(2018、日本心理学会)は歩きスマホ抑制のためのコミュニケーションのフィールド実験を行い、予備調査で選ばれた異なる歩きスマホ抑制の異なるポスターを3日間実験参加者に提示してコミュニケーション効果を検討したが、その際実験参加者の主観評価だけでなく、スマートフォンのGPSと加速度センサー機能を用いて実際に実験参加者の駅構内や駅外での行動を把握しそのコミュニケーション効果を比較した。本報告はこの研究のうちスマートフォンで行動測定した方法論部分やそれによって得られたデータ、加工方法などについて詳細に報告・検討し、今後の環境心理学的研究で利用可能な部分とそこでの制約や問題点について考察する。

15:45-16:05

6. 公共空間に設置された喫煙所におけるはみ出し喫煙防止のための介入実験 (1) パーティションの拡幅および工事期間中の代替喫煙所の効果

島田 貴仁(科学警察研究所) 本山 友衣(日本大学) 藤井 辰典(京都市) 開口 貴生 (京都市)

公共空間での受動喫煙の防止のために多くの自治体では喫煙所を設置しているが、喫煙所からはみ出しての喫煙や吸殻の投棄といった秩序違反が各地で問題になっている。このため、はみ出し喫煙削減のための喫煙所のパーティション拡幅と、工事に伴う喫煙所の一時閉鎖が、喫煙者の行動に与える影響をみる介入実験を行った。介入対象は京都市内の鉄道駅2駅に設置された2喫煙所であり、喫煙所の一時閉鎖中に代替喫煙所となった近傍の1喫煙所を加えた3喫煙所で、工事前・中・後の3日間の

朝・昼・夕の各 45 分間, 1 分おきに喫煙所内外の喫煙者数をカウントした。介入対象となった 2 喫煙所では,介入後,はみ出し喫煙が約 7 割減少したものの,2 割程度の利用者ははみ出し喫煙を続行した。また,工事による一時閉鎖中に代替喫煙所に転移した利用者は3割程度にとどまり,別の3割程度の利用者は,閉鎖された喫煙所周辺で喫煙を続けていた。代替場所がない1 喫煙所でも工事期間中に同程度の喫煙者が見られ,習慣化された喫煙場所利用の行動変容の困難性も示唆された。

16:05-16:25

7. 子どもとの縁は、大人の自由選択の感覚、幸福や健康にどのように関わるのか: 血縁と非血縁、養育的態度に着目して

芳賀道匡(日本大学) 坂本真士(日本大学)

少子高齢社会先進国である日本において、子育て環境の不備が問題となっている。特に親が片親である場合や、地域に子育て支援のための資源が不足している場合、子育てをする親と子どもの幸福や健康を害するリスクとなることが知られている。そこで、従来の保育園や幼稚園だけではなく、企業など様々な環境において、子育てを支援する環境を構築していくことが進められている。しかし、地域の大人が子育てを支援する上で必要な環境や心理的基盤、効用に関する検討は十分とはいえない。地域の大人が地域の子どもの子育てを支援するためには、従来の母子関係に関する研究だけではなく、より広い血縁や非血縁の子どもと関わる環境が大人に影響をあたえるプロセスについて分析する必要がある。本研究ではまず手始めに、学生を調査対象として、就学前の子どもとの縁(血縁、非血縁)や養育的態度と、自由選択の感覚、幸福(人生満足感)や精神的不健康の関連を検討した結果について報告する。

◆研究発表 3 ポスター発表 (在席責任時間 16:30~17:00) (6F フロア)

1. 防犯情報の発信における発信者表示と絵文字の有無による影響

石原 輝·畑 倫子 (文京学院大学)

「警視庁犯罪抑止対策本部」SNS アカウントの 2018 年 8 月 3 日時点でのツイートの中で一番反響が大きかった「オレオレ詐欺」に関するツイートをもとに、発信者情報と絵文字情報の有無で 4 群の調査用文章を作成した。文章は実際のツイッターアカウントからの発信と類似するようにし、スマートフォンで読んでいる場面も再現するために、被験者にはスマートフォン端末でツイートの内容と発信者に関する質問に答えてもらった。「情報は信頼できた」では、絵文字の主効果に有意な差がみられ、絵文字がない方が情報が信頼されていた。発信者が「親しみやすい」かについても、絵文字の主効果に有意な差がみられ、絵文字がある方が親しみがもたれていた。本研究の結果からは、発信者表示がない方が自分に関係があると思う傾向がみられ、絵文字のない方が情報の信頼性が上がる傾向がみられた。また、絵文字がある方が、発信者の好感が上がる傾向もみられた。

2. 高齢者の社会参加を促す地域の居場所づくり-特徴的な通いの場事例に着目した一考察-

森 裕樹・桜井 良太・藤原 佳典(東京都健康長寿医療センター研究所)

通いの場とは、健康増進・介護予防に資する活動を目的に、高齢者が容易に通える範囲に展開される地域の居場所である。活動内容にはサロンや体操が多く、介護保険による通いの場だけでも現在、全国で76、492か所ある(厚生労働省、2018)。その一方で、通いの場の現状としては、地域・活動内容による参加率の違いや、限られた参加者による重複利用なども散見されており、その役割が十分に果たせているとは言い切れない。そこで、全国各地の特徴的な通いの場に着目し、高齢者の参加を促す居場所づくりの要因を明らかにすることを試みた。具体的には、活動内容の特異性や参加者の範囲等を基準に、全国各地から18事例を抽出し、各事例の運営者に対してヒアリング調査を実施した。本発表では、18事例の調査結果に基づき、高齢者の参加を促す居場所づくりの要因や課題をまとめ、報告する。

3. 保健医療福祉領域の専門家と連携した「相談ブース」の設置により生じる教育現場の変化についての実践研究

石丸 利恵・苅田 知則・山下 祥代・伊勢本大・八木 良広 (愛媛大学教育学部)

本研究では、保健医療福祉領域の専門家(言語聴覚士等)と連携した「相談ブース」の設置によって生じる教育現場の変化を、実践研究(アクションリサーチ)によって明らかにした。国立 2 校園では、担当教員や特別支援教育コーディネーター、大学教員等が協働して、発達障害の可能性がある子(対象児)に関わる個別の指導計画・教育支援計画を策定し、支援・指導を行なっていた。しかし、通級による指導等の特別な教育・相談の場がなく、個別指導・相談が必要な子どもに対して十全に合理的配慮が提供できていなかった。そこで敷地内に「相談ブース」を設置し(物理的環境の介入)、言語聴覚士による言語指導、特別支援教育士によるソーシャルスキルトレーニング等を提供(社会・制度的環境の介入)することで、①対象児のいわゆる気になる言動(吃音症状等)が改善し、②教員が策定する個別の指導計画、教育支援計画も質・量ともに肯定的変化が生じ、③学級経営等の基礎的環境整備にも肯定的影響が認められるだろうと仮説を立てた。介入(実践)の結果、仮説は支持され、新たな改善点・仮説が抽出された(詳細は発表時に示す)。

4. 地域レベルにおける日照時間とパーソナリティ特性の関連の検討: 外向性と神経症傾向に着目して

吉野 伸哉(早稲田大学大学院) 下司 忠大(日本学術振興会 ・早稲田大学大学院) 小塩 真司(早稲田大学)

本研究は、パーソナリティの地域差を説明する要因として日照時間の影響を検討する。先行研究では、日照時間と脳内のセロトニン代謝回転、またセロトニントランスポーター遺伝子の長さと外向性や神経症傾向の関連が示唆された。このことから、日照時間が長い地域ほど、神経症傾向が低い人や外向性が高い人が多い可能性が考えられる。分析には株式会社 NTT データ経営研究所の「人間情報データベース FY18-02」のデータを使用した。DSQ 項目が不適当な回答者を除く 18922 名(女性 9227 名、男性 9695 名、平均年齢 47.74 歳)を分析対象とした。分析対象者が居住する都道府県ごとの各 Big Five 得点の平均値を算出し、都道府県レベルにおける変数間の関連を分析した。その結果、日照時間との相関(外向性: r=.38、神経症傾向: r=-.41)、さらに統制変数の影響を取り除いても関連が示された(外向性: $\beta=.23$ 、神経症傾向: $\beta=-.26$)。本研究の結果は、パーソナリティの地域差が生じるメカニズムについて示唆を与える。

5. 緑地保全活動による牛理的影響を検証する試み

甲野 毅 (大妻女子大学)

現代の高ストレス社会の下では、精神的、身体的に健康を維持するための活動が求められている。自然環境と触れ合うことは、活動者に癒しを与え、その健康を促進することは知られており、特に森林セラピー研究の領域ではその効用が明らかにされつつある。一方で里地・里山をはじめとした身近な緑地の荒廃が進み、様々な社会問題が起きている。その対策の1つとして、市民が参加する緑地保全活動が注目されているが、緑地保全活動を実践する活動者は、まだ不足しているのが現状である。保全活動には、緑地の生物多様性の向上に寄与する等の直接的効果と、参加者のコミュニティ形成やレクリエーションを促進する等の副次的効果があるが、新たな影響を示すことにより、市民の間でさらに、保全活動が広がる可能性がある。本ポスター発表では、緑地で実践する保全活動がもたらす影響を、生理的視点である心拍間隔から明らかにする試みを紹介する。

交通アクセス



本キャンパス (経営学部、法学部、大学院経営学研 究科、大学院法学研究科) 〒323-8586 栃木県小山市駅東通り2-2-2 TEL 0285-22-1111 JR小山駅東口より徒歩1分



◆会場:南館6階までは(青)(緑)ではなく,エレベーター(赤)をご利用ください

◆売 店:東館1階にセブンイレブン,館内各階にも自販機,給湯室がございます 受付にペットボトル飲料(お茶お水)のご用意がございます(提供:白鴎大学事務局)

学校周辺地図

